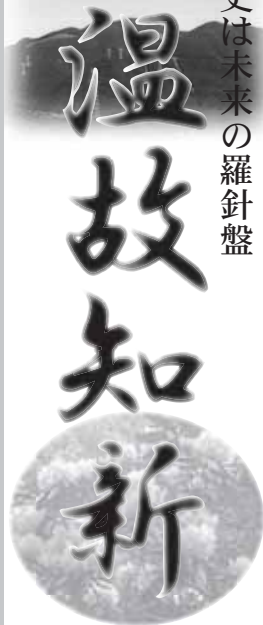


歴史は未来の羅針盤



今回は、近江日野商人館からお届けします。近江日野商人館では、展示資料をさらに充実させるため、日野腕、日野の薬や薬袋・看板・製薬道具、様々な民具、引札、広告など、日野商人関係や商店街関係などの様々な資料を探しています。ご協力をお願いします。

日野合薬の歴史

日野商人の「持ち下り商品」には、9月号に記しました日野腕の他に、「日野合薬」がありました。合薬は、薬の原料を混ぜ合わせて作ることから呼ばれた名前です。

日野合薬として全国に売られたのは、初代正野玄三（越川町）によって生産が始められた薬です。母の病の治療を受けたことをきっかけに、初代玄三は、元禄六（一六九三）年に京都の名護屋玄医（丹水）に入門し、医学を学び始めました。同十四年に日野に帰り、開業医として薬の製造を始めたのが、日野合薬の始まりです。

合薬が、日野の産業として成り立ち始めるのは、初代玄三が育成した弟子たちによって合薬の大量生産が可能となった享保十九（一七三四年頃のことです）。

弟子たちには、玄三の師匠である玄医の「玄」の一字が与えられ、

玄泉（清水町）、玄格（越川町）、玄徳（同）、玄龍（同）、玄遂（今井町）、玄順（大窪町）、玄証（同）、玄旦（同）、玄真（同）など十五名以上の弟子が育っていました。

一方、大当番仲間にも所属する日野商人は、この頃、享保年間の飢饉で商いが全く成り立たず、次々と仲間を脱退していました。それを救ったのが正野製の合薬で、脱退した商人たちは合薬の販売を委託され、全国に旅立ちました。

日野合薬の販売は、民家の一軒ごとに薬を預ける配置売薬の方法ではなく、全国津々浦々の町や村の店や旅館などに薬を預け、取次販売店を設ける方法でした。

昭和十（一九三五）年の記録でも、取次販売店に選ばれていたのは、「下駄屋」、「うどん屋」、「呉服屋」などで、人の集まる場所であれば、どんな田舎の村にでも取次販売店を設けています。

これらの取次販売店の店先には、日野合薬の看板が掲げられるのが常でした。その看板は、日野腕を複製してきた塗師たちの新たな仕事となりまりました。現在までに、江戸期から戦前にかけての日野合薬の看板が、北は北海道から南は九州に至るまで、全国から見つかっており、かつての日野の合薬産業の繁栄ぶりを示しています。

寛保三（一七四三）年四月には、村井・大窪町の製薬家百九名によって「合薬屋仲間」が組織されるまでに日野の合薬産業が発達しており、宝暦四（一七五四）年には、すでに蝦夷松前（北海道）や九州

博多でも日野合薬が販売されています。

日野合薬が全国に広まったこの頃、合薬産業で潤った日野の町で建造されたのが、日野祭に登場する曳山です。日野の曳山は過去に二十の町内で建造されていますが、初代建造の曳山の内で十七基までが一七三〇年代〜五〇年代の短期間に建造され、西大路以外の全ての曳山が、百九軒の製薬家が居住する町内で建造されています。

戦前・戦中には、日本が植民地統治した地域でも日野の薬が大量に販売されていた記録が残されています。

江戸期以来の日野合薬の原料は、大阪の道修町や京都の薬種問屋から仕入れており、今回、旧山中兵右衛門家の土蔵の床下から見つかった石薬も、京都の薬種問屋小西九兵衛店から仕入れたものであることが判明しています。



▲栃木県で見つかった日野合薬の看板（江戸時代）